羽山久男　著
『知行絵図と村落空間　徳島・佐賀・萩・尾張藩と河内国古市郡の比較研究』
古今書院　2015年１月　247頁　8,500円＋税

歴史地理学における近世の村絵図や村落研究において，地方知行を取り上げた研究はほとんど見かけない。そのため本書のタイトルにある「知行絵図」の用語には，聞きなれない人がいるかもしれない。上級ないしは中級家臣が藩主から一定の土地をあてがわれて，そこの農民を直接支配する制度を地方知行制と呼び，俸禄支給の蔵米制に対する制度である。近世初期においては諸藩においてこの地方知行を行う例は多く，蔵米制は下級家臣に限られていたが，次第に藩主権力と藩財政基盤の強化のために知行取り家臣の給地召し上げが行われて，多くは俸禄制の蔵米知行に移行した。そのような傾向の中で，御三家や外様大名系の大藩においては，一部に幕末まで地方知行を残していた。

このような傾向を，著者は本書の序章で解説している。その上で著者は，近世村絵図のうちとくに地方知行の行われていた地域の村絵図には，単に耕地の属地データばかりでなく属人情報が含まれることがあって，村落の空間構造はもちろん身分秩序など社会構造も掌握できて，歴史地理学研究上の重要な資料であると考えている。そして，一村全体が地方知行の村ばかりでなく，地方知行と蔵米地の混在する村をふくめて描かれた耕地絵図（田畑絵図）を，著者はとくに「知行絵図」と仮称して研究の対象にしている。

著者は長年徳島県の公立高校で地理・歴史を担当して教育現場にあったが，すでに退職後14年を経て後期高齢者になるのを目前にして，足かけ50年にわたり取り組んできた研究成果を著者なりに一書にまとめたいとの願望から本書の刊行を成し得たのだという。近世の村絵図に興味をいだくきっかけとなったのは，大方40年も前に勝浦川上流にある徳島県勝浦郡上勝町の町史編纂の委員を依頼されたことにあったという。町史編纂を委嘱されるには，それまでに地域研究面での実績があったことによるのだろう。

著者は高校教育現場での職務のかたわら，徳島地理学会や徳島地方史研究会などに参加して地域の歴史地理研究に邁進して，地域研究の成果をできるだけ授業内容にも取り入れていたという。退職後は人文地理学会や歴史地理学会など全国的な学会活動にも積極的に参加して，しばしば研究報告をされているのが見受けられた。平成12年（2000）刊行の『徳島県の地名』（日本歴史地名大系37，平凡社）の編集委員にも任じられている。私自身も若いころ高校教師を勤め，家庭訪問で訪ねた生徒の家が旧庄屋宅であって，そこで国境（くにざかい）の境論資料を目にしたのを機縁として今日までの研究を継続してきたことを思い，著者の長年にわたる一貫した研究姿勢にはあつく共感を覚える。

本書の全体構成は，冒頭のカラー口絵29点の掲載につづき，以下の通りである。

序　章―村絵図研究史を中心に―
第Ⅰ部　徳島藩の知行絵図と村落空間
　第１章　徳島藩の地方知行制の展開過程と地域構造
　第２章　幕末期の阿波・淡路国における地方知行制の地域構造
　第３章　阿波国内の知行絵図とその史料的意義
　第４章　名西郡白鳥村の知行絵図と村落空間
　第５章　名東郡観音寺村絵図と村落空間
　第６章　名東郡日開村限絵図と村落空間
　第７章　美馬郡郡里村絵図と村落空間
第Ⅱ部　佐賀・萩・尾張藩と河内国古市郡の知行絵図
　第８章　佐賀藩の郷村絵図と地方知行
　第９章　萩藩の地下上申絵図・一郷一村知行所絵図
　第10章　尾張藩の知行絵図と村落空間
　第11章　「非領国」の河内国古市郡蔵之内村
　終　章
　あとがき

序章では，まずわが国における近世村絵図の研究史を概説している。次いで著者が取り組んだ研究課題と研究方法を述べている。とくに，絵図資料に依拠した村落空間の研究では，文書史料と摺り合せて空間軸を時間軸とクロスさせての分析視覚が重要との見解を示し，そのためには絵図に記載されている情報の注記（小書き）をできるだけ

綿密にトレース図化することの必要性を提唱している。

本体は全部で11に章分けした論文を第Ⅰ部と第Ⅱ部に分けている。各章の末尾には小結にて要約し，終章では本書全体を総括した概要がまとめられている。第Ⅰ部は著者の地元である徳島藩領に関わる研究の骨格部分であって，全11章のうち7章までがここに当てられている。第Ⅰ章では「慶長二年分限帳」からはじめて，各期の検地帳・分限帳および明治元年の『旧高旧領取調帳』を調べて，徳島藩における地方知行制の推移を概観している。藩政初期には家臣団の在郷制を基本にして徳島城を中核に「阿波九城」を置き，家老クラスの重臣を城番として支城駐屯制を敷いていた。そして脇城には500人，その他8城には300人ほどの家臣団を配置して，重臣層の一村一円知行が普通であった。

元和3年（1617）の拝領高18万6千石余をもって計算すると，江戸初期における徳島藩の給地高は約77％を占めていて，蔵入地高は約17％にすぎなかったという。しかし，元和一国一城令による寛永15年（1638）の支城破却後における徳島城下への家臣団の集住と領主権の確立，また，延宝・天和期以降では知行替えと減知，さらに海岸筋での新田開発や塩田開発による蔵入地への編入で，次第に蔵入地率が増えていった。延宝・天和期の蔵入地高は36～38％，享保期では49％，そして明治元年には59％に至っていた。それでも徳島藩の幕末の給地高率は41％に及び，佐賀藩や尾張藩と並ぶ高さで幕末まで地方知行を温存させていた。

第2章にて，徳島藩のうち阿波国と淡路国での地方知行の地域的展開を究明する。第3章では，徳島藩の阿波国における耕地絵図の現存状況を調査している。著者の調査によれば，阿波国内で現存の確認できた耕地絵図は26ヵ村38点であって，そのうち属地・属人データを含めて「知行絵図」に該当するのは15ヵ村23点であるという。確認した耕地絵図38点全部については，各図の寸法・作成年・作成主体・内容・所蔵先などを比べた一覧表を掲載している。現存する「知行絵図」がいずれも吉野川中・下流域の村であることから，川成（水損）に関わって検地が行われた可能性を指摘している。

第4～7章では，阿波国の4ヵ村，4種類の個別「知行絵図」，つまり「名西郡白鳥村知行絵図」「名東郡観音寺村絵図」「名東郡日開村限絵図」および「美馬郡郡里村絵図」を具体的に研究素材として取り上げ，トレース図を作成して描かれた耕地区割りと，記載される属地・属人データの文字情報を明確に整理している。それらの情報を検地帳や地拂帳などの地方史料と照合して，検地帳と名負人・当作人の検証，蔵入地と給地の移動状況，家屋分布などを綿密に分析して，当該村落の空間構成と社会構造の様相を解明している。

第Ⅱ部第8～11章では，徳島藩の「知行絵図」との比較の意図をもって，同じく外様系領国型の佐賀・萩の両藩，それに親藩の尾張藩の「知行絵図」を各2ヵ村，それにいわゆる複数の領主が分割支配する非領国型の一つとして，河内国古市郡蔵之内村絵図の場合を取り上げている。分析方法は徳島藩の場合と同様に，微細なトレース図を作成して記載情報をつかみ，その地域の地誌や既存の研究文献を活用して，それぞれの村落の空間および社会構成を分析している。

終章では，第Ⅰ部と第Ⅱ部で分析対象とした徳島藩4ヵ村，佐賀・萩・尾張藩各2ヵ村，および河内国古市郡1ヵ村の「知行絵図」の全部を比較一覧している。比較項目は作成主体・目的・作成年代・縮尺・給人・給地と蔵入地率・農民階層など13項目を挙げている。

徳島藩の「知行絵図」は，同じ領国型の佐賀・萩・尾張藩の場合と比べると，第一に，同一の縮尺でありながら記載される情報量が多いことが指摘されている。そのため，村落における耕地の蔵入・給地の相給形態や，農民との関わりが1筆単位で明らかになる。第二に，作成の理由が異なることを指摘している。他藩ではいずれも藩府の指示で作成されているが，徳島藩の場合は藩命によるのではなく，地元村役人衆が自村内の土地状況を掌握する必要から自主的に作成したものと判断される。その証拠として，現存する徳島藩の「知行絵図」には，いずれにも藩役人など提出先の記載がないという。このような特徴を有する徳島藩の阿波国に残される「知行絵図」を，著者はとくに阿波型「知行絵図」と呼んでいる。

「あとがき」では，著者の50年余におよぶ研究活動の取組みと，研究に対する熱い思いが語られている。本書に所収の論考は，新稿もあるが多く

は学会誌に発表した論文ないしは口頭報告のようである。本書の各章と初出の論文・報告との関連については，その一覧表が示されている。

以上，本書の内容のあらましを紹介したが，以下，評者のコメントを若干述べさせてもらう。著者の「知行絵図」研究の方法面でのユニークさは，綿密なトレース図の作成である。通常，村絵図の研究では，図面に記載された文字情報の判読が重要であるが，小書きが多くて，普通は村役人らの筆記であって判読に苦労することが少なくない。とくにミクロな耕地絵図になれば，図面からの文字情報の十分な取得は至難である。

本書では，対象とした「知行絵図」11点のすべてが，精密なトレース図に復元されている。著者自身が，序章でトレース図化の有効性を説いていたが，本書ではそれがまさに如何なく実行されている。そして，扱った「知行絵図」のすべてを，口絵（1～29）と表紙カバーにカラー図版で収載している。それらの写真は，数枚をのぞいてすべてを著者自身が撮影したものだという。

本研究の基本資料として対象とした「知行絵図」が図版にてどのように提示されているかはもっとも注目されるところである。絵図の研究ではいずれも鮮明な図版，それもできれば全体図と必要に応じては部分図の提示が欲しいところであるが，実際には経費との兼ね合いで思惑どおりには果たせないのが現実であろう。口絵の一部にはルーペを使っても文字情報の判読が困難なものもあるが，長期に及ぶ研究成果の整理であれば，古い写真の提示しかできない事情は理解できる。ともあれ表紙（表・裏）と口絵を合わせて31点の図版収載には著者なりに十分な検討，整理の工夫がなされたものと判断できる。

著者は，研究の対象に取り上げる絵図を「知行絵図」と仮称すると前置きしているが，「仮称」呼びは不要であろう。近世の村絵図は，主題別に細分すれば，耕地の田畑一筆ごとを描いた耕地絵図（田畑絵図）がある。その中で，とくに耕地における給地ないしは給地と蔵入地の相給状況を主題とした絵図の学術用語が見出せずに「仮称」としたのであろう。著者の慎重な姿勢がうかがわれる。太閤検地以降，幕藩体制下において，大名領主が領地の一部を家臣にあてがった地方知行制から，いわゆる俸禄制である蔵米制への移行が進む制度史的研究は，歴史学にて十分解明がなされている。しかし，耕地の分類，移行，耕作者などという現象形態の具体的側面は，「知行絵図」が基本的な資料となりうるのである。

著者が「知行絵図」の研究に取り組んで，本書に至る成果をあげた大きな要因は，明治元年（1868）の『旧高旧領取調帳』の存在であろう。ここには，徳島藩のうち阿波国においてのみ，藩士の知行地が村ごとに記載されている。幕末に至るまで地方知行を残していた他藩では，知行主と給地高の個別的記載はとぼしく，多くは藩領に組み入れて書き上げられている。徳島藩の阿波国においては，村ごとに知行主とその給地高が逐一記されていて，地方知行の様相を詳しく知り得るのである。

著者は「あとがき」にて，自分の研究方法はグローバル化，デジタル化，細分化した近代的方法とは縁遠い，時代遅れのアナログの地理学であって，研究テーマを愚直に積み重ねる以外に方法がなかったと述懐している。しかし，一貫したテーマでの現存絵図の発掘・調査，関連史料の収集，各種文献との比較・検証・解釈は地図史研究の基本であって，そのような実証的基礎研究があってこそ，歴史地理学の発展的な研究が可能となるのである。著者の研究熱意と労苦の成果である本書は，近世村絵図研究のうち立ち遅れていた「知行絵図」の地図史的研究ばかりでなく，その活用による近世村落研究の指針になる書であると評価したい。

ただ，本書で活用している多くの資料・文献の中で，とくに萩藩の資料については，評者の地元でもあるので若干の気付きがある。萩藩の事例を取り上げた第9章第1節の冒頭にて，「萩藩では，藩政改革の一環として全藩政村を対象として，天保から嘉永期に作成された『防長地下上申』と『防長風土注進案』が藩命で編纂され，この付図として村明細図である「地下上申絵図」（以下，「地下図」と「清図」とする）を作成し，村に関するすべての地誌的情報を藩権力が把握しようとした」とある。しかし，この部分は書き改める必要がある。天保から嘉永期に編纂されたのは『防長風土注進案』であって，『防長地下上申』はそ

れよりおよそ100年も前の享保から宝暦頃までの期間に作成された両国全域の村明細書であり，その付図が「一村限明細絵図」である。村明細書（境目書，石高由来書など）は一村ごとの綴帳で扱いにくく，散逸の恐れもあったため，それを書写して明治18年（1885）に全98巻に編冊し，『地下上申』の表題がつけられた。それ以来，その付図は一般に「地下上申絵図」の名で呼ばれたが，正しくは「一村限明細絵図」であって，現在では正しく呼称されるようになっている。その明細絵図には各村２種類があって，各村庄屋から藩府へ提出された下図が「地下図」，それを基に藩絵図方が一定様式に清書したものが「清図」である。『防長風土注進案』は，天保改革の期に編纂された防長全域の地誌書であって，絵図は伴っていない。第１章の文章全体および関連の注記を読むと，以上指摘した点は，筆者には正しく理解されているように思えるので，冒頭部分のみにて文章表現に混乱が生じたのであろう。

次に，萩藩における「知行絵図」の事例として，本書で対象とした大津郡渋木村と大島郡小泊村の両村絵図は，ともに「上地」（あげち）に関わって作成された一郷一村「知行絵図」であって，事例研究として当を得ている。ところで萩藩では，時代は古いが宝暦年間に防長全域で大規模な耕地調査が行われて田畑絵図（耕地絵図）が作成され，一般に「宝暦小村絵図」と呼称されている。萩藩の事例にて，このことがほとんど言及されていないのが残念である。著者がこの小村絵図の件をまったく知らなかったわけではなく，終章の最後のあたりでこの絵図についてひとこと言及がある。ただ著者は，この絵図では一筆ごとのデータは得られるものの，「一村全図」がないとして切り捨てている。

当該「小村絵図」は，防長全域の一村内の小村（こむら）単位の詳細な耕地絵図であって，屋敷地・耕地一筆ごとに朱番がつけられ，田畑面積と石高および最小単位である穂木（ほのき）数が端書にて集計されている。村内の小村絵図は通常は一冊の綴帳にされており，給領地と蔵入地は別々に綴られている。この小村絵図は測量図ではなく見取り図であって，小村の配置を示す一村概略図も描かれていた。山口県文書館の「小郡宰判記録」や山口大学附属図書館の「林家文書」のほか，県内の数か所に小村絵図が残されているが，この本格的な田畑絵図についての研究は進んでいないのが実状である。萩藩の「知行絵図」の事例として，本書にてこの小村絵図の内容紹介がなされていればとの思いが残った。

（川村博忠）